様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月３日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７２０１０１
研究課題名（和文）　「小説」論的観点からのピンチョン研究

研究課題名（英文）　A Study of Pynchon from the Perspective of Novel Theory

研究代表者
石割　隆喜（ISHIWARI TAKAYOSHI）
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：９０３１４４３４

研究成果の概要（和文）：ザック・スミスが描いた『重力の虹』全頁のイラスト（全７５５枚）の分析を通して得られた間メディア的観点、ならびに「ポストヒューマン」研究が切り開きつつある主体に関する新たな観点から「〈小説〉的人間」の再考を行い、トマス・ピンチョンの『競売ナンバー４９の叫び』ならびに『重力の虹』においては、認識論的「見る人」である「〈小説〉的人間」の危機が、「探偵」（“eye”）から「電球」への「見ることの変態」を通して描かれていることを読み解いた。

研究成果の概要（英文）：Reconsidering the “novelistic” human both from the intermedia viewpoint achieved by identifying the content of each of Zak Smith’s *Gravity’s Rainbow* illustrations and from the new perspective on the question of the subject provided by posthuman studies, this research has shown that Thomas Pynchon’s *The Crying of Lot 49* and *Gravity’s Rainbow*, where one can observe a change in the dominant way of seeing from the former’s conventional privileging of the “eye” to the latter’s heroization of a light bulb, represent a crisis of the “novelistic” human, or the epistemological “seeing” subject.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２０１０年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| ２０１１年度 | 400,000 | 120,000 | 520,000 |
| ２０１２年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 総　計 | 1,400,000 | 420,000 | 1,820,000 |

研究分野：アメリカ文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：ピンチョン、小説論、ザック・スミス、ポストモダニズム、ポストヒューマン

## １．研究開始当初の背景

トマス・ピンチョン（Thomas Pynchon, 1937-）は、「ポストモダニスト」と称される小説家たちの中で、英語圏文学のみならず世界文学の「いま」を代表する一人に数えられる現役アメリカ人作家である。まず「ポストモダニズム」に関してだが、従来のポストモダン文学研究では、文学におけるポストモダニズムは、一般的にそれに先立つモダニズムならびにリアリズムとの関係で考察されてきた。

モダニズムとの関係で問われ、議論されてきたことは、以下のようなものである。まずポストモダニズムの「ポスト」とは何か。そ

れはモダニズムからの切断なのか、それともむしろモダニズムとの連続性ないしはモダニズム自身の変化が含意されているのか。切断を支持する立場に立つならば、ポストモダニズムとは文学がモダニズムのエリート主義を脱し、大衆文化の様々な要素（探偵小説、ＳＦ、コミックス、ポルノ等）を積極的に取り入れた、高級文化と低級文化の区別が無効となる新たな地平へと到達したことを意味する。と同時に、断片化、直線的プロットの放棄、他の文学作品への言及、言語そのものの前景化といったポストモダニズムに特徴的とされる小説技法はすでにモダニズムの詩学の中に見られるのであり、その意味ではポストモダニズムはモダニズムの延長に過ぎないと言わざるをえない。だがさらに社会全体の中での位置付けということを考えた場合、前衛としてスキャンダルたりえた文化現象であったモダニズムに対し、もはやポストモダニズムは資本主義の論理に染め上げられた文化、その中心的な商品であり、その点でモダニズムとは決定的に異なることになる。

こうしたポストモダニズムとモダニズムの相違点ならびに類似点に関する考察は、リアリズムをも必然的に巻き込むものであった。なぜならポストモダニズムは、伝統的なリアリズム小説が依拠してきた指示対象的言語使用のイデオロギー性を暴き、それへの不信を表明するものであり、その顕著に自意識過剰気味のテクストは、言語が単に「現実」を指差すだけの透明な記号ではないことを示すための表層的かつ遊戯的言語使用に由来すると考えられるからである。だがこうした見方に対し、指示対象から遊離した言語の戯れというならば、その萌芽は、断片的なテクストの引用を寄せ集める一方、社会の磁場が弱まったところに生成する意識の言語の自律的な流れを捉えようとしたモダニズムの詩学にすでに見られるという、モダニズムとの「連続性」を強調する議論がやはり存在する。

モダニズムとリアリズムを基準点としたポストモダニズムに関する従来のこうした議論そのものは、研究の蓄積として、すでに現在のポストモダン文学研究の主流となる参照枠を形成している。そしてこの参照枠は、ポストモダン作家であるピンチョンを研究する際にもまず第一に依拠されるべきものである。しかしながら、ポストモダン文学を考察するにあたり、主流とはいえないものの、二つの先行する「イズム」との関係性から捉えるのではない別の切り口が断続的に提出されてきたことも事実である。その中で、申請者が注目し、考察を続けてきたものが、「小説の死」という考え方である。これは、歴史のある時点ある場所（西欧近代）で誕生した「始まり」をもつ表現形式である小説（ノヴェル）の「終わり」をポストモダニズムに見る考え方である。ポストモダンの作家たち自身がこうした考えを作品中に表明しているだけでなく、同時期の批評家も同様の観点から同時代の文学を分析していた（さらに遡れば、Ｔ・Ｓ・エリオットのジョイス論の根底には、小説はフローベールとジェイムズで終わったとの認識がある）。

申請者はこうした「小説の死」という観点からのピンチョン研究を続けてきたが、ピンチョンにおいて「小説の死」が具体的にどのように現れているかを見る場合、キャラクターに注目する方法が特に有効であると考えられる。ピンチョンの「小説」はコミックス的であるという指摘が、そのプロットやキャラクターをめぐる考察の中でピンチョン研究の最初期からある。従来、こうした「マンガ」的プロットにおけるピンチョンのキャラクターの「キャラ」的平板さ、その「二次元」性は、先述のポストモダニズム論の主流をなすサブカルチャー（コミックス）の「純文学」への境界侵犯という枠組みの中で説明されてきた。しかし小説論的観点から捉え直した場合、ピンチョンのコミックス的キャラクターは、従来の近代的「小説」（特にリアリズム小説）がその使命として描き続けてきた近代的自我の持ち主としての「人間」（ルカーチのいう「個」と「社会」の弁証法的産物である近代的個人でありブルジョア的主体）とは明らかにその様相が異なることが直ちに理解される。このピンチョン的（文字通りの）「フラット・キャラクター」が「書く」ことだけではなく「描く」こととも親和性をもちうることは容易に想像されるが、実際に、二次元的キャラクターという特徴が最も顕著に現れている作品と考えられる『重力の虹』（*Gravity's Rainbow*, 1973）が、発表からおよそ３０年後に、アート作家ザック・スミスによりイラストレーション化されている。いわば、コミックスという二次元的メディアを内に取り入れて「ポストモダン」となったテクストが、今日では逆に二次元的に外化されるに至っているのである。

このような状況を背景に、イラストという異メディアを視野に入れつつ「小説」論的観点からピンチョンの主体表象を考察することの重要性が認識され、本研究を構想することとなった。

２．研究の目的

本研究は、トマス・ピンチョンの代表作『重力の虹』のイラストレーション化がピンチョン文学のみならず今日の文学世界全体の中でどのような意味をもつのかを明らかにするために、現代アート作家ザック・スミスによる『重力の虹』イラスト作品全７５５枚を、

所蔵するウォーカー・アート・センター（アメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリス市）へ赴き現地調査し、「小説」論的ポストモダニズム研究というべき観点からのピンチョン研究を実践的側面から推進してゆこうとするものである。

３．研究の方法

ザック・スミス『重力の虹』イラストレーション作品（ピンチョンの小説全７６０頁のほぼ全頁をイラスト化したもの）を所蔵するウォーカー・アート・センターへ赴き、３年をかけて（各年の調査期間は１０日間）、１年につき約２５０枚の割合で、小説本文との照合作業を行いながら、全７５５枚の調査を行うというのが当初の予定であった。調査とは、実際に作品を見ることでのみ確認可能ないくつかの点にかかわるものである。具体的には、（１）コミックス的要素が取り入れられたピンチョンの『重力の虹』のイラスト化であるスミスの作品は、コミックスがそうであるように大量生産された印刷物の触感を有しているのか、それとも芸術作品として作家個人の筆遣いすなわち身体性が刻印されたものなのか、（２）仮に作家個人の身体的かつ個性的筆遣いが見られる場合でも、それは代えのきかない「芸術家」のそれなのか、あるいは誰でもが習得可能な匿名性を特徴とするものなのか、（３）カラー作品の場合、材質感すなわち「絵はだ」は平板で滑らか（「フラット」）なのか、それとも油絵のように立体感のある厚みと重みを備えたものなのか、（４）複数のスミスのイラストを前にした場合、それは全体としてコマ割りされたコミックスの１頁のように映り、１枚１枚の作品は全体の構成要素へと解消されてしまうのか、それともあくまでも個々の作品は「芸術作品」としての重みを主張し続けているのか、といった点である。

以上が当初の予定であったが、初年度にウォーカー・アート・センターを訪れた際、作品が展示から外されていただけでなく、滞在期間中に作品の閲覧許可を得ることもかなわなかったため、当該年度はスミスのイラストレーション作品の書籍版のみを利用して小説との照合作業を行うこととなった。ただし、これだけでもいくつかの重要な点が明らかとなった。すなわち、（１）小説では濃密な内面描写が行われているにもかかわらずイラストにおいては現代アートとマンガが融合したかのような人物のデフォルメが行われていることから生じるギャップであり、（２）またこの主体表象の厚さとフラットさというギャップが矛盾や齟齬とは感じられず、どちらも等しく「現代的」と感じられる点である。この後者の点は「ポストヒューマン」という概念を通して考察することが有益だと思われたことに加え、次年度以降もスミス作品の閲覧が困難である可能性をも考慮し、この時点で研究方法の見直しを行い、ピンチョン『重力の虹』各ページのどの部分が選ばれ、どのようにイラスト化されているかを確認する照合作業は書籍版を用いて行うこととし、研究の重点をポストヒューマンという理論的観点から見た『重力の虹』における主体表象の問題へと移すことにした。

本研究は「『小説』論」的観点からのピンチョン研究を謳うものであり、したがって「ポストヒューマン」を考えることは必然的に「ポスト〈小説〉的ヒューマン」を考えることになる。とすれば、まず「〈小説〉的人間」とは何かを明らかにしなければならないが、この点に関しては、従来の小説論ならびにポストモダン文学論が参照枠として有効である。それらによれば、「〈小説〉的人間」とは、一言で言って認識論的人間である。しかるに「ポスト〈小説〉的人間」とは、認識論的「見ること」のドミナンスを問い直す主体ということになる。

本研究は、こうした方法論的枠組みから『重力の虹』における主体表象の問題を考察し、間メディア的観点からの実践的考察を理論的に支えようとするものである。

４．研究成果

研究の主な成果として第１に挙げられるのは、ザック・スミスによる『重力の虹』イラストレーション作品１枚１枚が小説版『重力の虹』各頁のどの部分をイラスト化したものであるかを明らかにできた点である。全７５５枚のうち、いまだ内容の判別が困難なもの（７点）ならびにある程度判別は可能ながら確証には至らないもの（１８点）を除き、すべてのイラストに、描かれた内容を示す「キャプション」（英語）を付すことができた。これは、錯綜したプロットで知られる『重力の虹』の頁ごとの要約を結果的に行ったということでもあり、研究者は言うに及ばず、それ以外の多くの読者のこれからの作品読解に資することが期待される。

第２の研究成果として挙げられるのは、「『小説』論」的観点からピンチョンにおける主体表象の研究を行うことにより、「〈小説〉的人間」とは何かという問題に関して従来とは異なる角度からの洞察が得られた点である。従来の小説論では、〈小説〉とは、一言で言えば人間の私的領域を覗くための媒体であった。イアン・ワットはサミュエル・リチャードソンの書簡体小説『クラリッサ』の方法論的特徴を ″keyhole view of life″ と言い、またヘンリー・ジェイムズは小説の作者を「窓辺の観察者」に喩えた。「意識の流れ」などは、小説の「人の生の私的領域への覗き見的関心」を端的に示すもっとも

〈小説〉的な技法だとすら言えるだろう。このように〈小説〉が「見ること」と不可分であるならば、その不可分さの程度に応じて、〈小説〉はリアリスティックになるということになる。これは言い換えれば、〈小説〉的リアリズムは認識論的（epistemological）であるということである。「〈小説〉的人間」とは、ある人のすべてを「見たい」「知りたい」と欲する epistemophiliac な人間なのである。

以上のような従来の議論に対してポストモダン文学からのアプローチを試みることで、新たに得られた洞察とは次のようなものである。ブライアン・マクヘイルは「モダニズムのドミナントは認識論、ポストモダニズムのドミナントは存在論」とのテーゼを唱えたが、このテーゼを従来の〈小説〉と主体に関する議論に接続することで、２つの点が明らかとなる。第一に、リアリズムとモダニズムがともに認識論的とされることから来る両者の連続性であり、第二に、ポストモダニズムが存在論的とされることから来る、認識論的「〈小説〉的人間」の変容の可能性である。後者の点に関して興味深いのは、実際のポストモダン小説にあたってみると、従来の「〈小説〉的人間」に代わって新たな主体の形（たとえば「存在論的人間」）が出現しているというよりは、むしろ従来の認識論的人間の危機が描かれていると見なせる点である。そのような形での「ポスト〈小説〉的ヒューマン」の典型的な例は、ポール・オースター『ガラスの街』の主人公クインであろう。ミステリ作家であると同時に探偵でもあるクインは、「私立探偵」（private eye）という言葉に含まれる「アイ」に関わる三重の語呂合わせ（「探偵」investigator である「私」I は「目」eye である）に取り憑かれているが、この認識論的な「見る人」である探偵クインは、物語の終わり近く、鏡に映る自身の姿を認識することができない。そればかりか、自分だと気付いた後も、「自分」を以前の自分とは異なる別人、「他者」として認識する。このように『ガラスの街』は、〈小説〉的「見る」人間、「目の人」が、「見る」ことに失敗する物語となっているのである。

ピンチョンに目を移せば、認識論的人間の危機としての「ポスト〈小説〉的ヒューマン」はやはり彼の作品にも見られる。『ガラスの街』と同じ構図を示しているのが『競売ナンバー４９の叫び』である。クイン同様、女探偵エディパ・マースも認識に失敗する（彼女は「トリステロ」の謎を解明することができない）。彼女も探偵としては失格である。だがピンチョンがオースターと異なるのは、エディパは探偵としては失格であったとしても、「見る人」としてはそうではないという点である。彼女は「見る人」、すなわち〈小説〉的人間としての性格を色濃く残している。「トリステロ」の謎の解明に失敗しているとしても、アメリカの「真実」（顧みられることのない見捨てられた「異邦人たち」aliens の存在）を「発見」するからである。この意味で、ピンチョンの『競売ナンバー４９の叫び』は、いまだ「知ること」と認識をめぐる伝統的な〈小説〉の側にあると言える。

これに対して、ザック・スミスがイラストレーション化した次作『重力の虹』において、「見ること」は変容している。それは二つの「イルミネーション」illumination のあり方から見てとることができる。第一に、「イルミネーション」という語は、第二次世界大戦を戦った両陣営は実は共謀しているという作品のパラノイア的ヴィジョンに関して用いられている。このシュールなヴィジョンが夜明けのようにみずから訪れる（みずから「光る」）様を言う時に、この語が使用されているのである。対して、「イルミネーション」という語はまた、現実に存在しないヴィジョンではなく現実そのものを照らす光を意味する語としても用いられる（例えば地中海の海岸を照らす太陽の光として）。これらはそれぞれ、ピンチョン作品における重要なモチーフを借りるなら、「電球」的／「探偵」的な「イルミネーション」と呼べるだろう。みずからイメージを投影し、浮かび上がらせる光と、現実を照らす光。プロジェクターのレンズと探偵の目（アイ）との違いである。『重力の虹』において、「電球」的イルミネーションの比重が増している。これは「見ること」が〈小説〉的な形ではもはやなくなってきているということを意味しよう。人に対する覗き見的関心から、世界に関わるヴィジョンを見ることに対する関心へと作品の重心が移行していると言ってもいいかもしれない（ただし、パラノイア的ヴィジョンを提示する作品全体を作者ピンチョン自身の「意識の流れ」と見なすならば、『重力の虹』はいまだ〈小説〉的振る舞いを見せていると言うことができるのだが）。いずれにせよ、『競売ナンバー４９の叫び』同様『重力の虹』もまた、〈小説〉的「見る」人間としての認識論的人間の危機を示していると言えるだろう（「電球」的ヴィジョンを「見る」キャラクターという形で「存在論的人間」と呼べる主体のあり方をも同時に示していることもまた確かなのではあるが）。

以上のように本研究は、スミスのイラストの内容を明らかにすることにより作品の読みの実践的側面を支えるものとなっていると同時に、ピンチョンにおける主体表象という問題を小説論と「ポストヒューマン」研究が交差する地点に位置付けながら作品の精読を行うことによって、「見ることの変態」という観点から、作品そのものの新たな読み

を提示してもいる。この読みは、ピンチョン研究の領域における一つの貢献であると同時に、より広く小説の「勃興」期の研究ならびに近代的主体とは何かという文学研究を超えた研究領域ともつながるものである。そしてこうした貢献ならびに新たに示された研究の方向性が有するインパクトは、日本国内に限定されるものではない（発表された成果には英語による論文も含まれる）。こうした点に、本研究の意義は認められるであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① ISHIWARI TAKAYOSHI, Rainbow’s Light: Or, “Illuminations” in Thomas Pynchon’s *Gravity’s Rainbow*, The Japanese Journal of American Studies, No. 24 (2013), 査読無、ページ未定

〔学会発表〕（計１件）
① 石割隆喜、小説の非人間化――あるいはポストヒューマン的読書、日本英文学会、2011.5.22、北九州市立大学北方キャンパス

６．研究組織
(1)研究代表者
石割　隆喜（ISHIWARI TAKAYOSHI）
大阪大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：９０３１４４３４

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし